盗について触れておきたい。

前者に比べて後者の方が、犯罪の構成要件が明確なように思われるが、金銭の場合（横領）のように必ずしもそうでない。また、神殿強盗に関する資料の残存状況は良くない。報告では、リュシアス第七弁論（いわゆる「聖なるオリブの木」事件）とプラトンの『法律』第九卷（853a-856a）を取り上げる。前者の分析からは、たとえ神話起源であれ一旦 *hieros* とされたものが持つ追及力の大きさが窺える。一方後者では、プラトン草案は神殿強盗に対する最も詳細な規定であり、実定法理解にも示唆的であることが判明する。最後に、以上の考察からギリシア宗教に関して一言述べたい。

確かに、神聖 (*hieros*) 概念は境界画定機能を有し、また取消不可能である。しかし、それが法の次元に、即ち紛争が裁判に持ち込まれるや否や、例えばアテナイでは、法廷弁論によってそれ以外の事柄と同様、いや実際はそれ以上に事態は非常に紛糾する。

古代ローマにおける *religio* 概念について

小堀馨子

近代西欧諸語の *religion* という言葉はラテン語の *religio* が語源であるが、ラテン語の *religio* で表わされる内容は、現代語の *religion* とは大いに異なる。宗教学では神学の影響を受けて教父が為した説明、即ち *religio* の語源は「*religare* 再び

縛る」に由来するだけで済ましてしまうことが多いが、この説明は十分ではない。そして *religio* の用法を考える際に、語源に意味の説明を求めるのではなく、語の意味の歴史の変遷を押さえる方が一層重要である。

本発表では以上の前提を踏まえて、*religio* の用法の歴史の変遷を探る。まず前三世紀にこの語が初出する際には、タブーや、忌諱に触れての言い訳という軽蔑的なニュアンスを内包し、*superstitio* の意味とも共通点のある用法であった。時代が下って前二世紀末になると、軽蔑的なニュアンスも称賛的なニュアンスもない、ただ中立的に「儀礼」の意味を表す用法が出現する。前一世紀に入り、キケロの同時代になると、用法に多様性が見られるが、古典作家の中で一番用例が多いのはキケロであり、五七七例を数える。キケロの用法は四つに大分される。一、儀礼や儀式といった事象を価値中立的に描写する用法、二、規範・規範破り・規範破りを戒める態度・規範遵守・良心の咎め・儀式執行に際しての細々とした気配り、といった態度を描写する用法、三、神々への尊崇・敬神の念・聖性などの宗教感情、四、迷信と同義の用法、である。二と四の用法は前三世紀以来の古来の用法と重なっており、一の用法はキケロの時代の少し前に出てきたものであり、三の用法がキケロの時代に加わったものである。四の用法が古く、*superstitio* という名詞がキケロの時代になって登場するということは、この時代に *superstitio* と *religio* の用法が分化したと言える。

このように *religio* と *superstitio* が分化し、前者が宗教的な事象を表現するための語彙として用いられるようになった、

第5部会

という事態が前二世紀末から前一世紀前半にかけて起こっていることは興味深い。これは丁度その頃にローマがギリシアをはじめとする地中海の諸民族と接して交流が始まってから一世紀が経った頃であり、間接的に他者との交流、特にギリシア哲学との交流がラテン語の語彙に大きな影響を及ぼしたと考えられるからである。

一方この *religio* と *superstitio* という二つの単語の間の関係も時代によって三段階の変遷があったことをグロズニンスキーが指摘している。グロズニンスキーによれば、キケロの時代（紀元前一世紀）には「適切な時期に適切な場所で適切な方法で神々の礼拝を行う *religio*」対「不適切な時期や不適切な場所において不適切な方法で勝手に神々の礼拝を行う *superstitio*」という対照であったが、小セネカの時代（紀元一世紀）には「われわれローマ人の正統な *religio*」対「彼ら野蛮人の正統ならざる *superstitio*」となり、ラテン教父の時代（紀元三世紀）には「真の *religio* 即ちキリスト教」対「偽の *superstitio* 即ち異教」という構造に変遷を重ねたという。それゆえ、この教父の時代に至って初めて、「キリスト教という *religio* 対異教という *superstitio*」という現代の *religion* の用法に近い対立項が出現した、と言えよう。

以上のように、*religion* の語源としての *religio* を考える際には、*religio* 自体にも変遷があり、元来の *religio* は *religion* から程遠い意味のものであったこと、それが後に時代と共に意味の変遷を経た結果、*religion* の用法に繋がったという点は、特記すべきである。

パウロの宗教的自覚について

南 部 千 代 里

ダマスコでキリストに会って救いを体験し、キリスト教迫害者から被迫害者となったパウロの宗教を形成するものは、いわゆるパスカルの「アブラハム・イサク・ヤコブの神」（『覚え書』）であり、キリストによって受継がれた「救いの神」である。

だが、宗教を必要としない人は、パウロの神は、一人の寡婦の魂を救うことができたかも知れないが何千万もの人間同士の殺し合いを食止めることができない、下らないものであるというであろう。このような考えに対してキルケゴールは、「信仰とは、すなわち、個別者が普遍的なものよりも高くにあるという逆説である」（『怖れとおのき』）と、道徳の反省が深く進むことによって宗教へと導かれると語る。道徳は、現実の世間が不義非道であるが故に、神の超越性と全能と悪徳の間にジレンマを生じさせる。この板ばさみを通して、もし人間の根底に虚無を発見するならば、道徳は崩壊し宗教への転換を形作る。つまり、人間が宗教を求める動機は、死の開示と罪の自覚であって、不道徳即罪ではないのである。人間は、自己の死を経験できないが故に他者の死を通して自己の死を自覚し、罪も生まれるながらして自覚を持たないが故に純粹無垢なものから教えられる、つまり清きものに接して道徳的責任を感じる時、罪を自